島根中山間セ研報 9：151 ～ 154，2013

資 料

飯南町における全国和牛能力共進会出品にむけた取組み
― 若手畜産組織「Gyu・牛会」による集中管理の成果と今後の課題 ―

山根　尚

The Approach to Exhibit the National Wagyu Capacity Livestock Shows in Iinan Town, Shimane Prefecture
―Results and Issues from to Keep Cattles Intensively by Young Livestock Organization “Gyu・Gyu-Kai” ―

YAMANE Sho

要　　旨

島根県において畜産業は主要な産業であるが，畜産農家の高齢化に伴い，飼養頭数，農家戸数の減少が続いている。飯南町では，平均年齢 36 歳の若手畜産グループを組織し，全国和牛能力共進会出品に向けて 1 年半の集中管理を行った。今回の共進会では，第 7 区種牛の部 6 席（14 県中 6 位）の成績であったが，若手畜産組織による全共出品牛の集中管理など新たな取り組みが高く評価され，今後の共進会対策として有効であることが明らかになった。

キーワード：全国和牛能力共進会，担い手，集中管理，若手畜産組織「Gyu・牛会」

Ⅰ　はじめに

全国和牛能力共進会（以下「全共」とする）は全国和牛登録協会が主催する全国規模の和牛共進会である。各地域の和牛改良の成果を競う目的で昭和 41 年に第 1 回大会が開催されてから 5 年に 1 度行われており，和牛のオリンピックとも呼ばれている。島根県は古くから和牛の産地で，現在も農業生産額の 3 割以上を畜産業が占めており（島根県農林水産部， 2011），全共に関しても第 1 回大会から連続して出品を続け，優秀な成績を収めてきた。しかし，近年は上位入賞の数が減少し，成績の低迷が続いている。成績低迷の要因として他県に比べ和牛改良進度が遅れているだけでなく， 改良に必要な母集団の確保が難しくなっていることも影響している。これは畜産農家の高齢化や若い担い手の不足，子牛価格の低迷などにより飼養農家戸数や飼養頭数が減少しているためである。その結果，出品農家を支える地域の担い手の確保が難しく，運動や調教など出品にかかる作業が農家にとって大きな負担となり，十分な取り組みが困難となっている。

これは第 10 回全共を目指す飯南町でも同様であり，ここ数年で飼養農家がほぼ半減し，飼養農家の約 50％が 70 歳以上の高齢者で占められている。

全共の出品区において第 7 区は共通の父牛をもつ 4 頭の雌牛を審査する種牛の部と，同じ父牛からなる 3 頭の肉質を審査する肉牛の部との総合評価で成績を競う。種牛性，肉質両面から評価するため，全共の中でも関係者の関心がもっとも高い出品区である。この第 7 区種牛の部での出品を目指す飯南町の全共出品対策協議会は，過去の出品結果の検証を行った。その結果，組出品で重要な審査基準となる斉一性の向上や飼養管理労力の低減が必要であることから，これらを目的に町内の候補牛を 1 か所で集中管理することを決定した。そして，こうした集中管理が可能な担い手として，飯南町内の若手畜産関係者で組織される「Gyu・牛会」に出品までの管理が任された。本報告は Gyu・牛会による取り組み内容を紹介し，集中管理の有効性について述べる。

Ⅱ　Gyu・牛会の結成と目的

Gyu・牛会は和牛飼育技術の研鑽の場として町内の畜産振興を目的に平成22年12月に結成された。結成当初は，受精卵（ET）産子を購入して育成することで，子牛の育成技術などの技術力向上を目指していた。しかし飯南町が全共候補牛の一括管理を行うことになり，その管理を委託要請されたため，これらの牛の飼育や調教を行うことで全国に通用する高度な育成技術の習得を目指すこととなった。会員数は14名，飯南町在住の畜産農家，JA，行政などの24歳～48歳の畜産関係者で組織されており，平成24年度現在の平均年齢は36歳である。

Ⅲ　全共にむけた取り組み経過

平成23年4月に全共出品対策協議会から候補牛の集中管理を要請され，Gyu・牛会員の意向調査が行われた。会員の一部からは不安の声もあったが，大半の会員が賛同の意向を示し，全共への取り組みが決定した。

平成23年6月に3頭，7月に2頭飯南町内の候補牛が順次集合管理施設である島根県中山間地域研究センター牛舎へ搬入され，Gyu・牛会による本格的な飼養管理が開始された。平成23年12月，全共の規定により出品牛の所有者を明確にする必要があり，候補牛の担当者をGyu・牛会員の中から決定し，5名の担当者による本格的な調教練習が始まった。平成24年5月に行われた飯石和牛育種組合候補牛の集畜審査では，飯南町の候補牛として5頭のうち4頭が選抜された。平成24年7月に島根県中央家畜市場において島根県最終選抜審査会が行われた。第7区は各地域の育種組合としての出品となるため，まず飯南町が所属する飯石和牛育種組合の代表牛が選抜され，その後に他地域の育種組合との最終比較審査の結果代表が決定される。Gyu・牛会管理の4頭は，すべてが飯石和牛育種組合の代表牛に選出され，他の育種組合の代表牛と競り合って島根県代表に選抜された。

Ⅳ　取り組み内容

１．飼養管理

給与飼料，給与量および手入れ方法などは島根県出品対策委員会が毎月行う巡回指導の結果を踏まえた上で，Gyu・牛会にも所属しているJA雲南の職員が中心となって決定した。また，毎週1回全体での追い運動後にミーティングを行い，その中でGyu・牛会員も飼養管理方法などについて議論しながら技術習得した（写真1）。

牛舎の清掃，飼養管理はGyu・牛会員による2人1組の当番制で行うことで，特定の会員に作業が集中しないように配慮し，個人の負担を軽減した。

写真1　ミーティングの様子

２．追い運動

追い運動は牛の担当者が行うだけでなく，毎週1回会員全体で実施し，約5㎞を強制的に歩かせた。平成24年7月の県代表選出後は，肢蹄を強化する目的で急傾斜地約30ｍを1日5往復し，10月の全共出品まで約3か月間継続した。

３．栄養度管理

牛の栄養度は繁殖牛の太りすぎを懸念する意味から審査の重要なポイントとなっている。尾根部や背骨，腰角といった6つの測定部位を触診によって1：非常にやせているから9：非常に太っているの9段階で評価し，6部位の平均が基準の範囲内である6を超えないようにマッサージ機（バイブレータ）や連尺（摩擦用具）を用いて対象部位を調整した。

また，すべての牛の栄養度が基準を超えていた5月末から2週間，候補牛の昼夜放牧を実施し，栄養度管理に努めた（写真2）。その結果，7月の巡回指導時にはすべての候補牛について栄養度は減少しており，その後の栄養度測定部位の擦り込みや追い運動の継続により，全共出品前には全頭が基準値内に収まっていた（図1）。

４．調教

調教は鼻かんに繋いだ手綱の打ち方により牛を操り，

審査時に理想的な姿勢に保つための重要な技術である。調教は牛の担当者が行い，調教アドバイザーによる定期的な指導のほか，7月の県代表選出後は各担当者が毎日1時間以上調教練習を継続して実施した（写真3）。

写真2　昼夜放牧中の候補牛

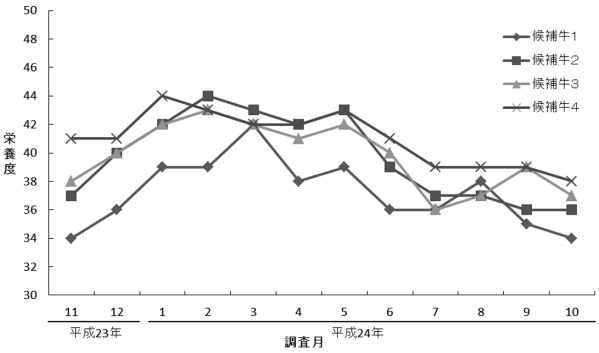

図1　栄養度の推移

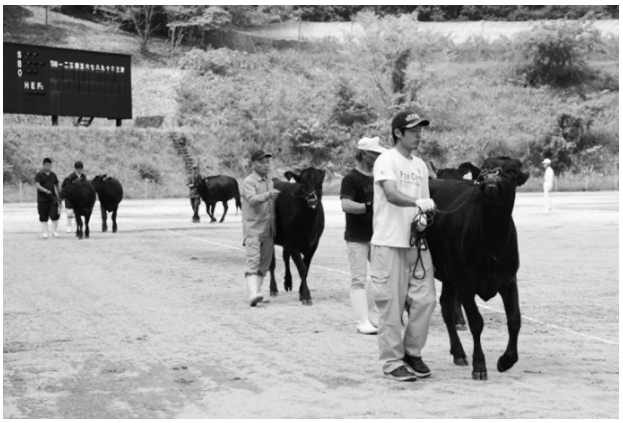

写真3　調教指導会の様子

V　全共の結果

全共会場では，長距離の移動や環境変化によるストレスから採食量の減少が心配されたが，4頭とも1年間同施設で飼育されていたことから，安心感もあり採食量の減少は見られず順調であった。

審査結果は，Gyu・牛会員が出品した第7区種牛の部では14県中6位の6席であったが，肉牛の部の順位が13位であったため，両方の総合評価で競われる第7区の最終的な順位としては14県中11位の1等4席であった。

審査会場では，他県の出品者と比較してGyu・牛会員の若さが目立っており，調教技術の高さは他県の関係者からも高く評価され，島根県の若い力と技術力の高さを全国にアピールでき，高齢化が進む島根県の畜産業において若い担い手が育っていることを印象づけた（写真4）。

写真4　全共出品の様子

Ⅵ　まとめ

今回の取り組みにより全共において一定の成績を納めることが出来た。また，Gyu・牛会員の意識にも変化を与えた。ひとつには出品までの取り組みを通して，全国で通用する飼養管理技術を習得したことである。さらには，九州など上位入賞する牛の種牛性の高さを確認することで，更に上位入賞を目指す目標にもなったと考える。

また，本大会で高く評価された調教技術については，本県の優秀な技術者のほとんどが高齢であるものの，今回その諸先輩方からGyu・牛会の若手に技術が伝承され

たことも重要な成果といえる。

今後も農家の高齢化などから飼養戸数の減少が続き，加えて飼料価格の高騰などから畜産経営を取り巻く情勢は厳しくなると考えられ，経営の安定化のためには大規模管理が進んでいくものと予想される。そのため，かつてのように個人農家が中心となった全共参加の取り組みは難しくなっていくと考えられる。そうした中，Gyu・牛会が行ったような集中管理は，農家の負担軽減，牛群としての斉一性の向上，地域の担い手育成といった面で有効な手段であり，今後の取り組み方法を検討していく上でひとつの手法として活用できる。

集中管理を行う上で留意すべきこととして，伝染病などの集団感染の予防，集合管理場所の確保，飼養管理方法などの情報共有の徹底などがあげられる。また，今回は全共経験もあるJA職員がリーダーとなり取り組まれたが，組織として活動するためには指導的立場となる人材の育成が重要と考える。

Ⅶ　Gyu・牛会の今後の課題

今回の全共に対する取り組みを通じて，地域の今後の畜産振興を担う存在として，Gyu･牛会への期待が高まっている。ところが，Gyu・牛会は任意の組織であり，結成されてから2年間の大部分を全共に対する取り組みに費やしてきたため，今後の活動方針が明確化されていないことが課題となっている。今後の展開として当初の計画通りET産子の育成のほか，地域の作業受託組織（コントラクター）や繁殖牛の共同管理などが考えられる。こうした活動の中から，Gyu･牛会員の意向，地域のニーズなどを考慮した上で活動内容を決定していくことが求められる。

引用文献

島根県農林水産部（2011）農業（平成23年農林水産関係資料）：5．